

焦土式

映画文学人生論

- 0311) 暗い絵 野間宏 参考：映画『わが青春に悔なし』
0321) 蝮のすゑ 武田泰淳 参考：映画『肉体の門』
0331) 桜島 梅崎春生 参考：映画『二十四の瞳』
0341) 深夜の酒宴 椎名麟三 参考：『どっこい生きてる』
0351) 死霊 埴谷雄高 参考：映画『青い山脈』

国破れて焦土あり

前回の焦土篇五篇では、戦争をはさんで、国民に与える影響力という点において、映画が文学よりも優勢になったという印象を受けた。現実にはそうではない。言論と表現の自由がみとめられ、第一次戦後派の登場によって文学は盛んになったはずだ。という反省から今回は第一次戦後派作家たちの代表的作品を選んだ。

暗い絵 野間宏 わが青春に悔いなし 黒澤明
蝮のすゑ 武田泰淳 肉体の門 田村泰次郎
桜島 梅崎春生 二十四の瞳 壺井栄
深夜の酒宴 椎名麟三 どっこい生きてる 今井正
死霊 埴谷雄高 青い山脈 石坂洋次郎

いずれも映画化されていない。テーマが重すぎる、内容が暗すぎる、筋のつながりが伝わりにくい、などの理由によるのだろうか。文学と映画というジャンルの違いをよく見きわめておきたいと思つて、やや強引になるが、何らかの共通要素を含む映画を下段にならべ、比較してみた。

『暗い絵』は昭和初期に京都で滝川事件のような思想弾圧や非合法活動を経験した学生たちの青春を描いた作品で、時代背景が黒澤明監督の『わが青春に悔いなし』と重なる。映画は主人公がゾルゲ事件に関与し、非国民として死んでいるが、小説の主人公は生き残り、暗い絵にこだわる。



焦土篇

映画文学人生論

『蝮のすゑ』の主人公は戦後の上海で生き恥をさらしている男。一応インテリなので、代書屋の仕事をはじめ、亡国の民でも生きていくのは案外むずかしくないかもしれないなどという。同じころ、東京では原始的本能と俊敏な闘争力を戦地から持ちかえった『肉体の門』の復員兵がパンパンたちと共同生活をしていた。

『桜島』と『二十四の瞳』との共通要素は戦争体験、それに島——九州南端の桜島と瀬戸内海の小豆島だが、『桜島』がもっぱら主人公の内面描写に終始しているのに対して、『二十四の瞳』は女教師と生徒との関係が主題になっている。

椎名麟三原作の映画では五所平之助監督の『煙突の見える場所』がよく知られているが、下町の人情話になっている。食うや食わずの貧しい日雇い労働者の絶望を描いた映画には今井正監督『どっこい生きてる』があり、『深夜の酒宴』に通じるところがあると思うが、椎名文学の特徴である観念を映画で表現するのは難しい。

埴谷雄高の哲学小説『死霊』は一部が戯曲化され、上演されたことはあるが、映画化はされていない。哲学を映画で表現するのは難しいが、今井正監督の映画『青い山脈』のように、哲学を引用してお笑いをとるという手もある。セネカ曰く「思慮深きものはたやすく怒らず」。

はこべらや焦土の色の雀ども

石田波郷